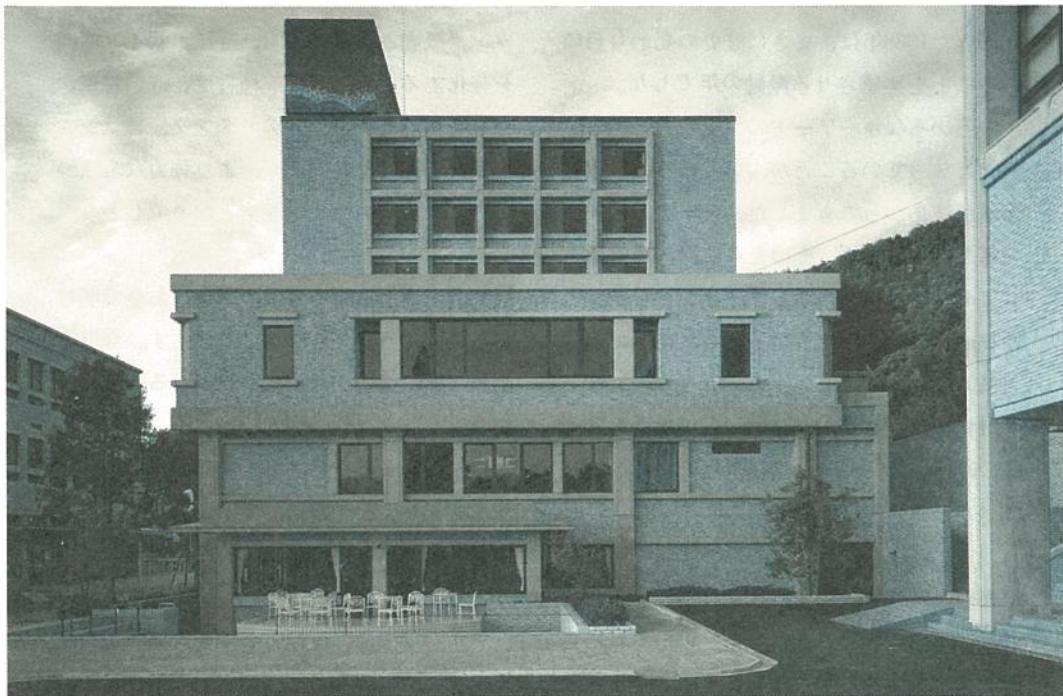


ARPA・K NEWS LETTER 地域計画・建築研究所

迎春

1989年 元旦



1988年10月竣工
橘女子大学学生会館（リパティホール）

アルパック ニュースレター もくじ

- 迎春1989年 今年もよろしくお願ひします..... 2
- 学研都市 10年 奥田東先生と語る（その2）..... 5
- 技術と地方の自立（下）..... 6
- おいしいはなし・食糧品店を変え始めた食事情..... 8
- 長崎オランダ村の「秘密」..... 10
- 上田の「まちの美術館」..... 11
- 京都新聞連載「新・都の魁（さきがけ）」..... 12
- 一日体験入園..... 12
- ネットワーク通信⑥どんぶり倶楽部..... 13
- 新人紹介..... 13
- 新刊旧刊書評紹介「都市開発のターニングポイント」..... 15
- まちかど..... 16

NO. **33**

ご荘健で新年をお迎えのことと存じます。

過ぎた1988年は、まさに歴史の変わり目にあることを実感させる激動の年でした。

いろいろなキーワードの中でも、「国際化」が軸となっていることが、いっそうはっきりと浮かびあがってきました。今年は「大航海の年」だそうです。そのためには、羅針盤としての、世界に通用するアイデンティティと論理が必要です。それは国にも、企業にも個人にも必要なことでしょう。

21世紀は、東洋の、日本の思想と文化の復興の時代—ルネッサンスの時代になるのではないかと考えています。

国際性と創造性 アルパックは、昨年から、21年の蓄積を固め、これからの10年を目指して、基本計画づくりと体制整備にとりくんでまいりました。新年早々から、順次具体化する所存です。

その手始めとして、国際的な活動を統括する「アルパック・インターナショナル」を創設します。

この種の業態では、国際交流が急速に進むでしょう。外へ出ることもあるでしょうし、内での仕事の仕方が変わるでしょう。輸出だけでなく輸入も進むようなものです。

これからの10年には、当社の社員の相当部分も、優れた才能を持つ外国籍社員によって占められていると予測しています。

昨年、東京の皆さんの、熱いご支援を頂いて、東京事務所を創設しました。関東のローカルな仕事と、東京発の情報センターの役割を担っています。早速に、東京と関東地域の

代表取締役社長 三輪 泰司

仕事で、活動を展開しています。

アルパック本体におきましては、シンク・タンク機能と、技術機能、特にデザイン部門を強化する計画です。これらは、近い将来、京都を中心とするシンク・タンク、エンジニアリング機関と共同して、より強力な組織づくりのためのステーションとなるでしょう。

社会的企業と職能 世の中万事、お金で明けてくれるような具合になっています。今ほど、企業マインドのありかたが問われる時はないでしょう。

企業は、お金儲けを抜きにしては、成り立ちませんが、その前に、コミュニティーに支持され、地域社会の一員として存在していることを大事にしたいと思います。

アルパックは、組織としても、個人としても地域と職域のために、ご奉仕することを、鉄則としてまいりましたが、ボランティア活動の輪が、国際的にも拡がり、忙しい目にあっています。

それは、結果として、人と人のふれあい、情報と情報の交流にフロンティアのある、この種の業務にとって、また、技能と技術を磨き、それらをマネージする私達の職能を自覚し、社会に広めていくのにプラスになっています。

昨年10月から、「新・都の魁^{ききがけ}」という京都新聞の企画に、ご協力しています。今年の10月まで続きますが、京都のまちづくりの集大成にお役に立ちそうです。

今年は、名古屋で「世界デザイン展覧会」が開かれます。「都市とデザイン」をテーマにシンポジウムも持たれます。名古屋事務所

は、元氣旺盛です。大阪の「花と緑の博覧会」は、あと400日たらずになってきました。

「花の文化園」の計画に、大阪・京都の両事務所連合でとりくんでいます。

12月3日、八瀬野外保育センターでは、設立20周年記念の「落葉まつり」が盛大に催されました。室内楽を指揮された岩淵先生はじめ顧問が塾長になって「夜塾」をしました。

ふるさと談義が盛り上がりました。

今年も、北海道から九州まで、全所員、皆様のご支援に応じて、元氣旺盛で、頑張ります。

宜しく、ご指導、ご鞭達のほど、お願ひ申し上げます。

■ 専務取締役 糸乗 貞喜

今年のこだわり言葉は「する、なる、なるようにする。」昭和34年6月に発行された「進路」という雑誌の巻頭言に、田村敏雄が表記のような文章をかいています。この文章をそれとなくさがしはじめた12年（気にしていたぐらい）、やっと国会図書館で見つけました。「伸びる力を伸ばして月給が2～3倍になるようにする政策をとることが大切」という田村の言葉が「計画」というものの本質を示していると思います。今年もよろしくお願ひします。

■ 常務取締役 霧田 稔

今年、年男です。年男の運と己れの努力を集中して、次の10年をにらんだ布石を打とうと思っています。

この10数年は、個人としても、関西学研に徹底してみた期間でした。多くの方及び機関の協力のもとに、関西学研都市も法律になり、まがりなりにも姿を現しつつあります。

次の10年は、関西ローカルズムを持って、

もう一度国際化に向かって取り組んでみようと思っています。

■ 取締役京都事務所長 道家 駿太郎

アルパックも地域に根をおろしたシンクタンクとしてスタートして20数年、やっと全国各地で地域に深く入り込むシンクタンクが多数活躍する時代となり、我々のめざした道が全国的にも認められる時代となってきました。

これまでの方向性が正しかったと自信を持っています。

本年も世界中の多様な情報の結集をするともに、地域の人々の持っている心や風土を大切にしながら仕事をしていきたいと思いません。

■ 取締役大阪事務所長 金井 萬造

昨年は、大変お世話になりました。新年にあたり、皆様に御挨拶を申し上げますと共に本年もよろしくご指導の程お願ひします。

業務として、内需拡大に対応した開発プロジェクトが増加し、要求される水準もシビアになっています。例えば、個人的で地域の人々の心をとらえ、しかも、国際性や長期的に発展する展望がもてるものなど開発コンセプトづくりが重要になっています。本年は、これらの計画づくりに努力したいと思います。

■ 取締役京都事務所副所長 倉本 恒一

昨年は街の中の野鳥公園、今年は花の文化園と生物と自然をテーマにした施設設計シリーズが続いています。日本の街には花が少ないといわれます。また日本が豊かになったといわれる反面、古来からの自然と同化する感性は忘れさられているように思います。身近かな生活の一部として自然を大切に、自然から学ぶ真の文化的豊かさに到達するのは、まだこれからの課題といえるでしょう。

■ 取締役名古屋事務所長 尾関 利勝

88新年のごあいさつで、87年来星野ドラゴンズはじめ名古屋がなにかと話題になり、88年も楽しませてくれるでしょうと書きましたところ、予想的中致しました。89年名古屋はドラゴンズだけでなく、世界デザイン博をはじめ各種の国際会議で賑やかになりそうです。皆様に応援され、激励されてアルパック名古屋も6年たちました。今年もシンク&ドゥーの精神で努力し、名古屋とともに話題性の豊かな集団で有りたいと願望しています。

■ 大阪事務所副所長 重本 幸彦

南方熊楠と博物学の視点。南紀白浜の温泉街のはずれの丘の上に、博物学の巨人＝南方熊楠（みなみかた・くまぐす）の記念館がある。

昭和の初め、天皇へのご進講の際、彼は菌類の標本をキャラメル箱に入れて持参したという話は、ある種の健全さを感じさせる。

最近、博物館ブームであるが、総合の視点で物事をみる博物学の見直し傾向も、あまりに細分化専門化した現代への反省かもしれない。博物学的関心と視点を忘れないで、今年もがんばりたい。よろしくお願ひします。

■ 第4計画部長 山口 繁雄

情熱をこめて一步前進。昨年、ヨーロッパの沿岸リゾートの調査に行っていました。海辺でノンビリと肌を焼く彼らの姿を見て、ヨーロッパ社会の豊かさを感じました。

我国もヨーロッパのように豊かな生活を送れるように、そのための地域や都市のあり方を、環境や施設のあり方を、今年も追求してまいりたいと考えています。御期待に添えない点もあると思いますが、「情熱をこめて一步前進」という気概に免じて御容赦願ひたいと思います。本年もよろしくお願ひ致します。

■ 第5計画部長 杉原 五郎

第5計画部は、若手・中堅・熟練といった年齢のバランスもよく、それぞれ個性豊かなスタッフで、いまたいへんノッています。

都市及び地域をよりヒューマンに計画することを基本に、交通計画、港湾計画、環境計画、事業計画、科学技術論等の専門分野における計画力量も蓄えて1989年も引き続き、社会的要請に応じてさらに大きく飛躍できるよう奮闘したいと思います。よろしくお願ひします。

■ 第3計画部長 北条 誠

都市が大きく変わっている。これが、今、仕事や日常生活環境のなかで感じていることです。高度情報化、国際化等が叫ばれ、内需拡大ブームの煽りを受け都市は異常な状況にあります。

都市政策、まちづくり、アーバンデザイン、都市施設設計を業とする私達にとっては、いろんな意味を含め技量が問われています。

これらの動きを近視眼的に受け止めるのでは無く、生活者としての視点の上に、プランナーとしての責任の重大さを改めて問い直して行きたい。今年もよろしくお願ひ致します。

■ 東京事務所長 斎藤 侑男

昨年は東京事務所の元年。東京での仕事が十分軌道にのっていなかったという事情もあって、新幹線に乗る機会が随分増えました。

そして、不思議なことに、車中で知人に会うのです。出張の帰りだとか、単身赴任で自宅に戻るところだとか。東京での営業ということで出て来る地域も北海道から九州まで全国に広がっています。今更に東京の位置を思い知らされました。また区レベルでの生活資源を丁寧に追いかけているコンサル事務所もあるようです。重層都市東京で、自らのスタンスを探って、2年目に挑戦したいと思います。

■ 九州地域計画研究所一同

九州アルパックもはや12年が経ち、これまでになかったような新しい分野の業務も増えてきました。業務の中身は益々難しくなってきました。対応していただくだけで汲々としておりますが、所内外の援助のもとになんとか要

求に応えるようにがんばっております。今年には久しぶりに大型(体が)新人が入りますので心新たになんぼっていきたくて思っております。新年に当り今後とも何卒よろしく願います。なお、コンサルタント業務に興味をもっている若い人をご紹介頂ければ幸いです。

学研都市10年

奥田 東先生と語る [その2]

三輪 泰司

11月28日の午後、例によって、奥田先生がヒョウと事務所にお越しになりました。

国際高等研究所の「学者村」構想の話から、バイオ・サイエンスの話に、そしてエネルギー問題の話におよびました。

木の葉の智慧 人類は18世紀の産業革命以来科学技術のすばらしい進歩による恩恵を手にした、と思っています。

先生のご専門の農学の世界では、空気硝酸法や石灰窒素法などが発見されて以後、肥料の工業化が進歩しました。

しかし生物界を見ますと、根瘤菌や土壌細菌の働きで、空中窒素固定がされています。

植物は水と空気中の炭酸ガスから光合成によって炭水化物をつくり、酸素を空気中へ返しています。

クロレラも遊離窒素固定の力を持っています。水の中の方が、炭酸ガスがよく溶けて濃度が高いので、効率がよいのは当然です。

しかし、これを利用しようとすると、水分を乾かすのにまたエネルギーが要ります。

人間が大掛かりな設備や沢山のエネルギーを使ってやっているのに、彼らは可愛らしい葉っぱで、常温でやっています。

自然の巧みな営みに比べると、人類の知識や技術は、まだまだ完全でもなく、合理的で

もないのです。

国土の割りに、エネルギー資源に乏しく、人口は多い日本です。第2位の経済大国になった日本です。日本は21世紀へ向けて何をしなければならぬのか。

昭和52年2月5日、上高野の先生のご自宅で、岡本先生らがディスカッションされていた学研都市の「神代」時代の理念をお聞きした時以来、先生から繰り返しレクチャーを受けたお話は、こういう具合に始まりました。

ついでながら、この日、先生の「秘書官」に任命されました。まだ、解任されていませんので、任務は続いている筈です。

理念は進化する 2月5日の会合で、その後の構想実現への戦略を研究しました。

まず各界有識者による懇談会で調査研究する。それをもって各界へアピールし、行政計画を行ってもらう。推進協議会と推進組織が必要だろう。事業化へ10年のプログラムを組んでおこう、などなどです。

計画地は「神代」時代から想定されていました。京阪奈丘陵です。石原藤次郎先生らと祝園の弾薬庫に当たられたことも聞きました。

京都南部—南山城地域については、昭和46年(1971)から日本住宅公団の木津・加茂ニュータウン、所謂2K計画の調査も行われてい

ました。もっと以前一昭和38年頃には、京阪奈丘陵開発計画がありました。そういう地域を知っていることが、私に手伝わせる理由だということも、聞かされました。

お宅を辞して出たら夜も更けて、雪が積っていました。

先生の発想から、基礎的研究開発のイノベーション・センター建設を目標に、立地計画の討議から「地域振興」の思想が重視され、進め方として「産・官・学」連携の方法が受け入れられて理念が構築されてきました。

1977年2月に発足した準備会は「関西研究学園（仮称）基本構想案概要」で、この3つを基本理念として提示しました。

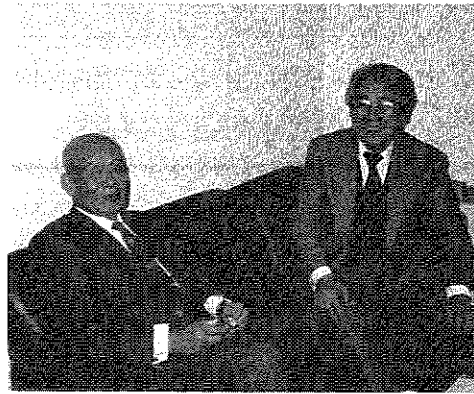
1985年に開催された「サイエンス・シティ国際シンポジウム」では、調査懇談会から、行政調査の成果をまとめて、「関西の、日本による、世界のための、関西文化学術研究都市」と定義し、学術研究振興・産業振興・地

域振興および新しい都市づくりの4つを計画コンセプトとして提案しています。

いまや関西文化学術研究都市の意義は、単にいわゆる関西の地盤沈下対策ではない、もっと大きな、グローバルな目標を持っているのだと認識されています。

理念は、進化してきました。これからも、もっと発展してゆくことでしょう。

(みわひろし)



寄稿

技術と地方の自立（下）

斎藤 周久

日本の技術的劣位の問題は決して「技術者」の質などといった問題ではない。「日本的経営」そのものに起因している。社会的にみても、技術の開発よりも技術の導入、実用化に重きがおかれたため、工学部系統の学生が必要とされ、理学部系統の学生は「オーバードクター問題」を始め、海外への頭脳流出など様々な問題をひきおこしている。

また、経営管理という面から経理制度に例をとってみると「わが国では管理のための原価計算が実践の場に定着するまでにいたっていない。それにもかかわらず日本の工業製品が品種とコストの両面においていかに国

際競争力を発揮しているのはどういうわけなのか」と疑問をなげかけている。（荒川龍彦『原価計算がわかる本』）実は日本企業の利益率の低さは定評があり、欧米の企業家の間では「日本企業は適正な利潤を放棄しシェア拡大に狂奔している」との批判が根強い。

コンピュータを導入したらかえって仕事が遅れ、さらにはコンピュータをチェックすることが仕事になるという笑えない話さえある。こうした日本的な経営土壌から、IBM産業スパイ事件(1982年6月2日)について別な観点から考えてみると、日本のメーカーに市場を開拓させてある程度産業として市場が形成さ

れてきた矢先におこされた事件ではなかったかと考えている。日本の経営システムのなかで十分にコンピュータを使いこなせるのは金融業界など一部の業界に限られ、本格的に市場が形成されるまで積極的な売り込みはさけていたとさえ考えられないだろうか。なぜなら金融の第3次オンライン革命などのときには、しっかりIBMがおさえているのである。

以上のように、日本の技術、経営方式は世上いわれているほど高くないのではないかと思う。

どうしたら良いか

今日、「貿易摩擦問題」がまさに茶の間の話題となってきたが、あるラジオのディスクジョッキーの方が、真面目に「働いて儲けることがどうして悪いのか」「良い製品を安く売って何が悪いのか」と訴えていた。また、大前研一さんがいわれるように、日本における米国企業の直接生産を勘案したならば、日米の実質的な市場浸透度はかわらないとする意見もある。

もう十年以上も前に、伊東光晴先生が『経済学は現実にこたえうるか』という著書のなかで、「日本の国家予算の一割を技術開発にむけるべきである」とのべていたが、まさにその通りと思う。

こうした観点にたつて「地方」の立場から将来を展望し、一、二点ふれてみたいと思う。

なぜなら地方には未だ生活環境という点において、少なくとも大都市よりは優れた点をもっており、流出した人材をよび戻すことができ、それが地方を変えていくものと考えからである。

「地方」とは言い難いかも知れないが、尼崎市の行政姿勢は示唆的である。同市の地盤沈下はここ約15年、凄まじい勢いですすみ、昭和46年から58年までの間に敷地で2,000平

方メートル以上の工場47工場が移転、従業員も10万6千人から6万6千人に急速に減少し、さらに円高による「鉄冷え」に直撃された。将来の尼崎をどうするかと思案の結果、やはり技術というメシの種をどう育てるかが鍵という結論に達し、テクノサポートシステムを発足。市内の中小企業に対し、技術相談員が市内近辺の適切な公共研究機関や研究者を紹介、技術革新への橋渡しを目的とし、新たな技術立市をめざしているという(1988年5月4日『毎日新聞』)。

また、信州にあっては、自らも会社を経営するある実業家の寄稿を紹介したい。

「このままでは、地方は大都市のパーツメーカーとしての存在でしかなく、これを変革するためには研究開発やソフトウェア開発の部門を誘致したい。」という趣旨で、人材の集積をねらっている。(21世紀ニュービジネス協議会会長、吉田総一郎『信濃毎日新聞』1988年5月15日)

今も昔も地方の悩みの一つは、人材の流出である。大都市に流出した人材も、異常な住宅事情をまえに機会あらばUターンを考えている。加えて「日本的経営の残滓の特に多い会社」、内橋克人さんの言葉を借りれば「村度」社会にあってはますますそういった衝動にかられており、各種調査結果にも、中堅サラリーマンの転職意志がかなり高いという結果が、これを裏付けている。

従って、先にみた尼崎市のような施策は、単に道路などの公共投資に走りがちな地方自治体がまだ多いなかで傾聴に値しよう。しかし、他からの企業誘致にとどまらずもう一步ふみこんで、自ら技術を生み出すということを実際に考えてよいと思う。単なる技術導入の帰結は、日本をして米国の下請け部品工場ならしめることの焼き直しの危険さえある。

そのためには現在ある地方自治体の農業試験場、工業試験場などの研究施設の大幅な拡充、また企業にあっても、共同研究機関の設置、経営管理システムの研究開発など、自らの手で作り上げていく施策が必要と思われる。このような視点からの試みとして、全国的に「異業種交流会」が、徐々に広がりを見せている。しかし、異業者、異質の資源を結合・複合化する「融合化」を狙ったものであり、既存の技術を大きくふみでたものとはいえない。ことに「円高」の進行に伴い、中小企業の業種転換などがいわれ、行政サイドからも積極的に推進されようとしているが、昭和63年度の国の一般会計予算をみてもわずか12億円にすぎない。

やはり、基礎研究にたずさわる人材を育成

していくことが重要なことである。都会からのUターンをおし進めるための受け皿を都会の資本に頼むというのではなく、時間と金にかかるが自前の技術を作ることが、結果として必要になる。フランスなどでは「まず大企業に就職し、つぎにはその知識をもって中小企業に生かし、そして再び大企業で活躍するのが普通になっている。」まさしく日本においてもはじめは都会の企業に就職し、その知識を生かして地方の企業で活躍するといったことはそれほど荒唐無稽な考えとは言えない。そのためにも、国家財政ならぬ地方財政の1割位を投入し将来の布石にしていくような首長、企業家の出現をのぞんでやまない。

(さいとう かねひさ)

斎藤さん、御寄稿たいへんありがとうございました。

おいしいはなし 食糧品店を変え始めた食事情・3つの事例

尾関 利勝

食べたい人が食べたい時においしい魚が買える魚屋さん

もし自分たちがプロ意識を持つようになったとしたらこの商売を止めようと心に決めて、魚屋を10年やってきた夫婦がいる。職人かたぎの、売り切れたらもうおしまいと言う商売は現代的ではない。いつでも食べたい人に食べたい時に、おいしい魚を供給したい。そこから生けすをベースにした魚屋が始まった。名古屋の藤ヶ丘にある金水の朽名さんは脱サラで魚屋を始めた動機をこんな風に話していた。

この店は正月の三が日も営業している。前以て注文があれば夜の10時でも店をあけて待っている。食べごろを見計らって魚を料理する。そのための素材をいつでも供給できるよ

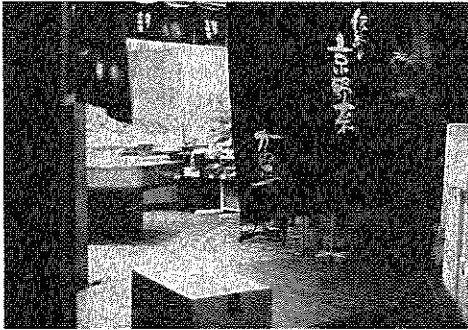
うに生けすが置いてある。生けすは運搬車の大きさも考えて総て自分で設計し、意図に合わせてまちの工場で作ってもらった。生けすを置く魚屋さんは結構あるけれど、魚が死んでしまっ困るという相談を良く受けるそうだ。いくら売上が良くても、ロスが多ければ利益が少ない。その点この店の場合、職人的な商売では現代的でないと言う朽名さんが、ほとんど職人的に自分で考えた設備を生かしてロスの少ない商売をしている。最近では包丁を使えない主婦が多いから魚を1本丸ごと買う客が少ない。そのためこの店では、客が帰って直ぐ食べられ、かつ家庭での御客さんにもそのまま食卓に出せるように、店の名前が入っていない陶器の皿に料理した刺身を盛り付けて客に渡す。皿は返してもらうことにな

っているそうだが、回収率は余り良くない。そのロスは大いにしたことはないという。

集客エリアは随分広く、遠い所では岐阜市や豊田など名古屋から約30km位の所から買いに来る客もあるそうだ。今では、大きな問屋さんが相談に来たり、東京から大手の有名百貨店が視察に来たりする。専門店でもスーパーにできないサービスがあるから十分対抗できると朽名さんは言う。魚屋も昔のままの商売ではいずれ淘汰されると話していた。

京野菜を見せて売る八百屋さん

ブティック風八百屋が京都にあると聴いて訪ねてみた。京都では比較的新しい住宅地でもある西加茂箱ノ井町、交通公園の近くのちょっとした商店街になりつつある通りの一角に、のれんを下げた小さなお店・かね正があった。季節の京野菜を見せるべく、店の真ん中に見栄え良くならべてある。店内の商品数はそう多くなく、テーブルに椅子が置いて有



野菜を料理法のメモといっしょに



ったり、スペースはゆったりとしている。展示の大半は箱詰めケースの見本になっていて、商品は贈答品や土産として利用されているらしい。例としては東京の呉服屋さんが内見会用のお土産として数百ケース注文してくるといった利用があるそうだ。日々の生活にと考えると少々財布のひもの堅い主婦には手が出にくい御値段だった。(亭主の飲み代と比べれば安いものだが) 他地域では真似にくい京野菜ならではの付加価値がある。

かって、京都在住のところに、竹の子などの季節の旬のものを東京などに京土産として持って行った経験があるが、京都を知らない人にとっては京野菜など何の価値も無い。そのところが気になって聴いてみると、案の定野菜毎に料理法を書いた小さなメモがつけてある。その気の行き届きがうれしかった。ついでながら、京野菜やおぼんざいについての本がかたすみに数冊おいてあったので1冊買って来た。本を売る八百屋も珍しい。店を始めた動機は聞き忘れたが、元々は青果卸しと小売の両方をやっていると聴いて、こうした店を始めるノウハウがあるとうなずけた。商品は近辺の農家と契約栽培で供給している。一角でつけものを売っていたが、契約栽培の関係でロスが出る。そのロス対策としてつけものを作っているとのことだった。

評判になっているせいか、ヒアリングも多いらしく、店の人の対応も慣れていている。各地のデパートからの引き合いも多く、催物として出展することがよくあるらしい。本店とは少し雰囲気が違うが、大丸四条店にも出ている。野菜は全国どこにでもあるものだが、地名がついて付加価値の高い商品になるのは地域の名物として素晴らしく楽しいことだ。

輸入ブランドものより店の企画商品が客に支持される総合食糧品店

こここのところ急速に総合食糧品店の事情が
変わりつつある。一ころはサンシ（本店四日
市）の様な省エネ店舗が物流の原点として注
目された。ここしばらくは飽食の時代を背景
に、高級グルメ指向が増えてきている。デパー
ートの地階食品売り場も大幅にリニューアル
されて、これまでの単なる客寄せサービス機
能から、見せて楽しむ店舗に変わってきた。

最近では輸入物ブームも過ぎましたね。それ
より自社の企画商品の方が人気があります。
という話を昭和30年代に開業し約30年近い歴
史を持つ関西の総合食糧品店・いかりで聴い
た。阪神間で150坪位の小規模マーケットを
約10店舗もち、最近では京都の嵯峨野に新店
舗を開業している。大手スーパー、生協、在
来商店街などとの競合関係が厳しい商業環境
にある阪神地域で、高級指向の食糧品を比較
的低価格で売り、店舗展開を広げてきた。

比較的低価格とは言ったがそこは高級指向
の商品だから単価はそう安くない。高級指向
の食糧品を売る場合、商品グレードを揃える
ことが既成商品のテナントでは難しく、結果

として企画商品が半数を占めるようになった
そうだ。何気無く店舗を見ていたが改めて店
内の商品を見なおしてみた。この店では、高
級指向の食糧品を原価の割に安く売っている。
そのため原価率が高くなるが、それでもやっ
ていける秘けつは生鮮食品にロスが少ないこ
とだそうだ。これができるのも顧客の支持と
自社の企画商品によるところが大きいとのこ
とだった。この点の実績とノーハウが厳しい
競合関係の中でこの店が根強く生きている理
由だと感じた。ついでに素人でも総合食糧品
店のグレードを見分ける方法を教えてもらっ
たのがこのヒアリングのおまけだった。

以上の3題に共通するところは、①いずれ
も住宅地に立地する小・中規模店舗であるこ
と、②商売人の商品に対するポリシーが明確
であること、③ロスの少ない商売をしている
こと、④はやっていること、⑤商売に自信と
意欲を持っていることなどであった。近ごろ
出不精で人の話を聴くことが少ない。おいし
い話を聴いておいしい貯金が出来た。

（おせき としかつ）

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

長崎オランダ村の「秘密」

伊坂 善明

観光バスの窓から、大きな風車と木造帆船
の先端が見えてくる。見なれた日本的風景と
異った世界、これが長崎オランダ村の第1印
象である。

大村湾の中の小さな入江をはさんだ10ha
の敷地にオランダの港町・商人町などをてい
ねいに再現していることに驚く。入江は、2
隻の船が10分ごとに対岸との連絡を行っている（料金は無料）。ここ楽しみは、この船
に乗って対岸に見えるオランダの美しい町並
みに感動すること、あたかもオランダに行っ

たような雰囲気の中で、食事や買物をするこ
と、この2つに尽きると言える。通常のレジ
ャーランドにあるようなジェットコースター
などの乗り物はない。こういった施設を「テ
ーマパーク」と言って、日本には数少ないと
いう。（ディズニーランドもテーマパークら
しいが、中にはジェットコースターなどもあ
り、ライドパークの性格も強い。）

行ってみて強く感じたことは「ここに、何
度もくる客がいるだろうか」ということ。帰
ってから資料を調べてみると、案の定「テ
ーマパークは、リピート性に乏しい」ことがわ
かった。その根拠は、

① 昭和58年にオープンして以来60年ごろに

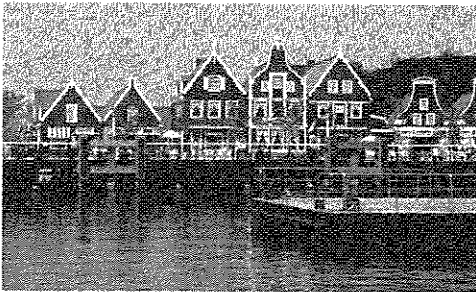
は年間120万人の入場者を集めているが、利用者の70%近くは九州圏内の人。ところが61年から九州圏の利用者の割合は低下し、180万人集めたと言われる今年は、30%弱にまで低下している。九州圏内の人が一ととおり来場した結果だろう。事業会社も心得ているのだろう、近年は年間2億円もの広告宣伝費を関西・関東向け中心に使っているという。

② リピートを図るため年々新規投資を行い施設を作っている。

近ごろ、レジャーランドや〇〇村の開発計画が目白押しの状況。それらのリピート性をどうみるかということは、ひとつのポイントになりそうだ。

蛇足ながら、冒頭にオランダの風景を再現していると書いたが、オランダはご存知のように低地で平坦な国土で、オランダ村のような入江に迫った山のような風景はないはずである。

(いさか よしあき)



上田の「まちの美術館」

池田さちよ

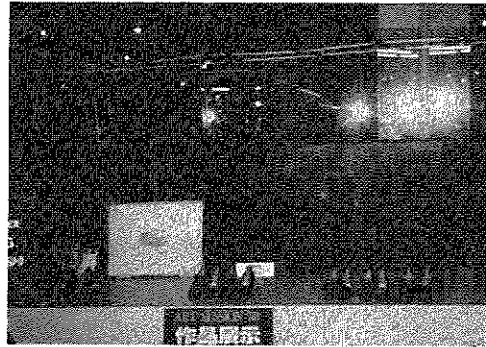
夏のはじめに、長野県上田市の喫茶店で、上田のまち全体を美術館にしようとする運動を進めている若い彫刻家に出会いました。地元の芸術家や、上田出身で東京で制作活動をしている人を中心として、毎年夏休みに中央公民館で後輩のための講習会を開いているそ

うです。

その日頃の成果を市民に披露しようと、昨年は中央公民館で展示活動を行いました。今年はさらに一歩進めて、それを街全体に繰り広げようとしていました。「美術館か博物館に足を運ばなければ芸術にふれられなかった、たくさんの人びとに見てもらいたい」ということで、企画を進めてきたそうです。

彫刻とか芸術とかいってもよく判らないのですが、8月の一、上田市へ行って観てきました。

上田の駅を降りて、商店街を歩いて観てまわったのですが、ありました、ありました。店の前に、明らかにそれとわかるようにディスプレイされているもの、又、商品の中に埋もれていて、商品なのか作品なのか判然としないもの、せっかくの作品がとっても可愛想に思えるもの……。かと思えば、プログラム



を見て、何が展示されているかがなかなか判らないもの等、様々でした。

企画の段階で、発表予定の作家一人一人が商店主と交渉して、展示場所を決めたそうです。従って、お店の人の感覚にも、大分左右されていたようでした。

いっぽう、一般市民の関心はもうひとつとあったところで、ながめたり写真を撮ったりしていると訝しげに見られたり、「それは何ですか」と声をかけられたりしました。

しかし、面白い企画でもあり、今後も数年をかきねていくことによって、本当の意味でまち全体が美術館になればとの思いで、帰りの電車に乗りこみました。

(いけだ さちよ)

京都新聞連載

「新・都の魁(さきがけ)」

石本 幸良

京都新聞110年記念企画として10月から、毎週木曜日の朝刊で「新・都の魁」の連載が始まっております。明治16年に明治維新以来、ようやく活況を取り戻しつつあった京都を背景に、商家と世相を銅版画で活写、紹介した町案内書「都の魁」という本が刊行されて話題をよびました。新・都の魁はその現代版作りです。

「都の魁」が明治時代の商店の店構えを表現したのに対して、現代の京都の「町」を表現し、変貌著しく、大きく揺れ動く、京都の「今」の町を書き残すことを目的としています。1年間の企画で、毎週一つの町を取り上げ色々な手法で町を表現しています。

アルパックでもこの企画をお手伝いすることになり、多くの方々と、一緒に京都の「今」の町を表現しております。毎週ということで、通常の業務とは違った「締切」に終われ、悪戦苦闘の連続です。それでも、よく

知っているつもりの町でも、図面に表現するため、再度丹念に見てまわりますと、思われ発見をしたりして、結構楽しみながら、お手伝いさせて戴いております。(いしもと ゆきよし)



一日入園体験記

小原 麻利

一日入園とは、アルパックが保育施設の基本構想、設計等を行う際まず最初に行う業務であり、アルパックの伝統的な調査方法でもあります。

アルパック創業の時期から、設計・監理・診断・相談まで含めてたずさわった幼児施設の数は100ヶ園以上になるといわれています。その経緯の中で生まれ出てきた調査方法がこの一日入園なのです。

当然私が一日入園の経験する以前に先輩所員の方々が経験を積まれてきているわけです。

そうなるとその内容が非常に興味深く思われますが、一言でいうなら、「保育園で一日生活する」ただそれだけです。方法、形式などにもありませんし、保母さん、保護者、園児、調査員どの立場で見るといふ設定もありません。しかしそこでは、自分がその環境の中で存在し、様々な視点でその環境を意識できるということです。見、聞き、話し、感じ、そこでは「ただ至る(生活する)」ことが全ての可能性をもち、保育施設の実体を写し出してくれます。今の表現方法は少し抽象的ですが、私の場合いつも子

供の視点で見つめることにしています。できるだけ目の位置を合わせスキップして一体になって全てを見つめます。すると不思議なことに床の高さや、空の高さが、明確に異なって見えてきます。それと同時に、自然が直接感じられるのです。

しかし、ただ主観的に物ごとを見つめるだけでなく、一日が終って次の日には客観的に鮮明に子供たち1人1人の顔まで思い出されるから自分自身驚いてしまいます。ARPAKにおける初めてのソフト事業、制度から設計技術、デザインに至るまで「身をもって実践し、科学的に考える精神」を貫いてきた幼児施設業務、また「環境から宇宙へと心を飛ばしたかせる」の意味が一日入園により少し経験できたような気がします。(こはら まり)

ネットワーク通信⑥
どんぶり倶楽部
—幅広い層の方の気軽な交流の場—
山田 龍雄

このグループは、九州事務所の公認会計をいただいている松崎栄一さんの呼びかけにより、昭和62年8月にスタートしたものです。入会、退会の規定もなく参加したい人ならだれでも歓迎することをモットーとしている自由な会ですので、現在、会員数は70名程になっているそうです。私もそのメンバーとして昨年の9月に参加させていただいています。会員の方はサラリーマン、弁護士、医者、自営業者など様々で、会に参加するたびに新しい人が入っているようで、メンバーはどれも参加率の高いレギュラー、そうでない準レギュラーに分かれるようです。私は残念ながら今のところ準レギュラーにとどまっています。

会の内容としては、今年の9月までは月2回、1時間程ビジネスビデオを見て、ビールを飲みながら、意見交換を行うということで

ですが、意見交換もホットな話題が出れば、先程のビデオは関係なく、その話題に集中して話が進んでいくということになるようで、それがこの会の魅力にもなっているようで、参加している方も、異った職種の人と交流して、幅広い情報を吸収していこうという意欲にあふれているようです。

今年の9月からは、月2回から月1回に改めて、会員の方々にそれぞれ好きなことを話していただくことを中心に企画していく予定だそうです。今後は益々楽しみです。

(やまだ たつお)

新入紹介 入社にあたって

渡辺 千秋

アルバイトとして約半年の期間を経、11月より社員となりました。配属は京都・第3計画部です。

出身は九州熊本県で、京都へ移って5年になります。

私は、他のみなさんの多くと異なり、建築・都市計画に関して学んだ経験を持たず、出身の夙川学院短期大学では美術を学びました。

当時、高校時代も含め連日デッサンに明け暮れ、色や形を観察する習慣を身につけようとしたことは、現在の私にとって貴重な経験であったと思います。

その頃の私の関心は、スケッチをしたり、新しい色の組み合わせを発見したり、木を削ったり、また、作家・学生を含め他の人ほどのような制作活動をしているか等でした。

美術科でインテリアデザインを学んだ後、一年間建築事務所へ勤める中、まずは半人前にも満たない自分をなんとか一人前にするのが重要課題となりました。それは、直接的に人やお金がかからんでものを創ったり計画し

ていく時に、社会的な価値や位置づけを考
えることであり、それが自己の成長に繋がるも
のだと思います。これは、分野を問わず造形
活動に共通することだと思います。

まだまだ知らないことの多すぎる私ですが、
このような中で、ARPK・Kとの出会いをプ
ラスへ生かし、身の回りに向けられがちな小
さな興味の範囲を拡げてゆければ、また、新
たな視点を増やしていければと思います。

最後に、転機にあたり右往左往する私に、
貴重な助言をくださった方々に、この場をか
りて、御礼を申し上げます。

(わたなべ ちあき)

新入社員紹介

MUITO PRAZER / (始めまして)
カテリナ・ナガミネ

今年の10月から正社員として地域計画・建
築研究所京都本社（以下地域計画と略する）
にお世話になることになりました。

私はブラジル・サンパウロ生まれの日系
二世でありまして、1984年に京都大学工学部
建築第二学科へ研究生として留学して来たこ
とが、この京都での長い滞在のきっかけとな
りました。初期の計画していた三年間より長
期間滞在する大きな理由は、新大都会育ちで
ある私は、京都の小規模とその奥深さにひか
れたためです。

来日後から今まで、最も理解に苦心してい
るのが「日本的常識」です（約5年間が過ぎ
た現在でも、この壁にあたることがあります）。
来日の目的は西欧には当時よく知られていな
かった「日本スタイル草の根まちづくり」に
大きく興味をもったことです。ブラジルでの
生活のなかで20年間に至った独裁的軍事政権
のもとでは「草の根」は考えられなかったも
のでありました。学部（サンパウロ大学都市
学・建築学部）ではスラム問題をメインテー

マにしている際に、当時主流であったモダニ
ズム方式一律では納得できないところが多い
ことを実感として持っていたところに、日本
のまちづくり運動（具体的には田村明さんの
横浜企画調整室）等の情報に出会ったことが
来日のきっかけになりました。京大に三年間
（1年目は研究生、後の2年間は修士課程）
在学するに至って、日本における「草の根運
動」にもそれなりの問題点があることが分か
るようになりましたが、今でも私にとっては
一つの課題であります。

地域計画を知ることが出来たのは、まだ京
大の西川研に在学中であった頃、北海道の小
樽港についての報告書を読んだときでした。
とても興味を持ち、地域計画に昨年的一年間
研修することになりましたが、いままでの体験
では、自分に似合っている所であるようです。
長期間、異質の文化に接触することは既存の
価値感を解体し、組み立て直す課程につなが
ることであるため、地域計画においての第一
の外国人正社員であることは、お互いに貴重
な体験になるのではないかと思います。

今後も「非常識」な点が多いと思いますが、
どうぞよろしくご願ひ致します。

(カテリナ・ナガミネ)

カテリナ・ナガミネ(左) 渡辺千秋(右)



新刊旧刊書評紹介

月尾嘉男監修 東洋経済新報社

「都市開発のターニングポイント」

紹介 齋藤 侑男

「夕闇の平穏な洋上で、ゆるやかに方向を転換している豪華客船がある。船内の客室で美味な食事をしたり友人と談笑をしている人間にとって、この方向転換を感得するのはきわめて困難なことであるし、船員にまかせて安心して人間にとってはその必要もないことである。現代都市はこの豪華客船に類似している。」—「はじめに」の最初のフレーズである。そして、こう続いている。「だが、客船と都市には重大な差異がある。前者には到着すべき目的の場所と経験を持つ練達の船員がいるのに対比して、後者にはそれがないことである。都市はそれらを用意しなければ、洋上を迷走する船員のいない客船になる。」

本書は、以上の認識をベースに、「わずかな速度や方向の変化も敏感に感知し、様々な場所や環境での航海にも経験があり、未知の海洋にも挑戦する勇気のある船長にも匹敵する都市の先達」10人の講義を企画、とりまとめたものということである。

10人の講義であるということと、その10人の活動の舞台が現代都市の最先端に位置しているということから、この小さな本に含まれている情報の量は膨大なものになっている。建築家磯崎新氏が、自ら関わった仕事を中心に現在の世界のトップレベルでのコンペや事業の進め方を説明する中で、地価、建物と道路、市場開放、デザイン、感性について言及するとき、一つ一つの議論と同時に、その背景となっている都市開発の現場での方向性を感じとらない訳にはいかない。こうした生の

素材の持つ力強さと、議論の素直さは、メディアプロデューサー残間里江子氏、建築家(コンサルタント)山下明氏の場合についても同様で、豊富な実例をもって説明がなされている。

一方、本書は、一つの「東京論」という側面も強くもっている。東京が引き続き強力な慣性力を持って進んでいくだろうということ、その中で首都圏の再編が進みつつあること、ベイエリアが一つの焦点になっていること、下町のポテンシャルを生かした再開発を望みたいこと等々が、それぞれの専門分野の分析と都市計画等の対応の実績の中から語られる。

さらに、佐貫利雄氏は東京との対比の中で全国の200都市の盛衰の方向を基幹産業企業のリストライメージとも関連させながら、断言してみせている。

これだけ盛り沢山の内容を持ちながらも、全体の論調が一般論にならないでいるのは、一つ一つの論拠が、具体性を持ち、数字に裏づけられているからである。例えば、「明治以来今日までの県別の人口の推移を見てみると、明治13年、日本の47都道府県の中で人口が一番大きかった県は新潟県でした。その要因としては米の問題がある。明治初期の日本を支えている経済の中心は農業、とくにその中の米であったわけです。……しかしながら今日どうかということを見ると、昭和40年現在で新潟は11番目、昭和60年になりますと、14番目になります。それに対して、東京は……」(同上佐貫氏) かなり読みごたえのある本である。 (さいとう ゆきお)

まちかど

島本の水飲み場

藤田 武彦

ここは大阪府島本町です。サントリーの山崎工場や、古くは楠正成・正行父子の別れのあった桜井の駅で有名ですが、「山崎」「桜井」以上には島本という地名は知られてないかもしれません。

写真は町内にある水飲み場です。4年前に役場の人たちがつくったもので、看板に一応「町外の人、営利目的お断り」とあります。(谷崎の小説から蘆刈コーナーと命名)

島本にとって「水」は特別な意味をもっています。それは、町内の飲料水(実は工場の用水も)は全て地下水の汲み上げで対応し、一応基準があるので浄水しているとのことですが、カルキ分は極々わずかでしかもこれが実にうまいからです。町内には「水無瀬」という地名もあり、古くから伏流水が多かったものと思われまます。

「土地の水に慣れる」ということばがありますが、筆者は現在大阪市内に住み、よくも悪くも慣れてきましたが、ここ島本の人には明らかに大阪の水と自分たちの水を区別してい

るようです。

さて、この水飲場はそうした島本の人たちの自慢が表われています。実は看板の効果もなく周辺のまちからこの水を汲みにくる人(喫茶店など)があとをたたないとのこと。

あとから知ったのですが、地下水汲み上げで飲料水をまかなっているまちは淀川左岸側にはいくつかあるらしく、人口が増加するにつれ、少なからずこの飲料水は問題となっているとのこと。

かつては水ぐらい飲めれば何でもいいじゃないかという話だったかもしれませんが、島本へ行くたびうまい水が妙にうらやましくなってくる今頃です。(ふじたたけひこ)

島本の水飲み場(蘆刈コーナー)



ARPA・K (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600	京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075) 221-5132(代)
京都事務所			FAX (075) 256-1764
大阪事務所	〒540	大阪市東区石町1丁目1番地 (天満橋千代田ビル2号館)	TEL (06) 942-5732(代)
			FAX (06) 941-7478
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル6階)	TEL (052) 962-1224(代)
			FAX (052) 962-1225
東京事務所	〒402	東京都港区芝大門2-3-14 (一松ビル1号館402)	TEL (03) 437-3405(代)
			FAX (03) 437-3407
九州地域計画研究所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092) 731-7671(代)
			FAX (092) 731-7673